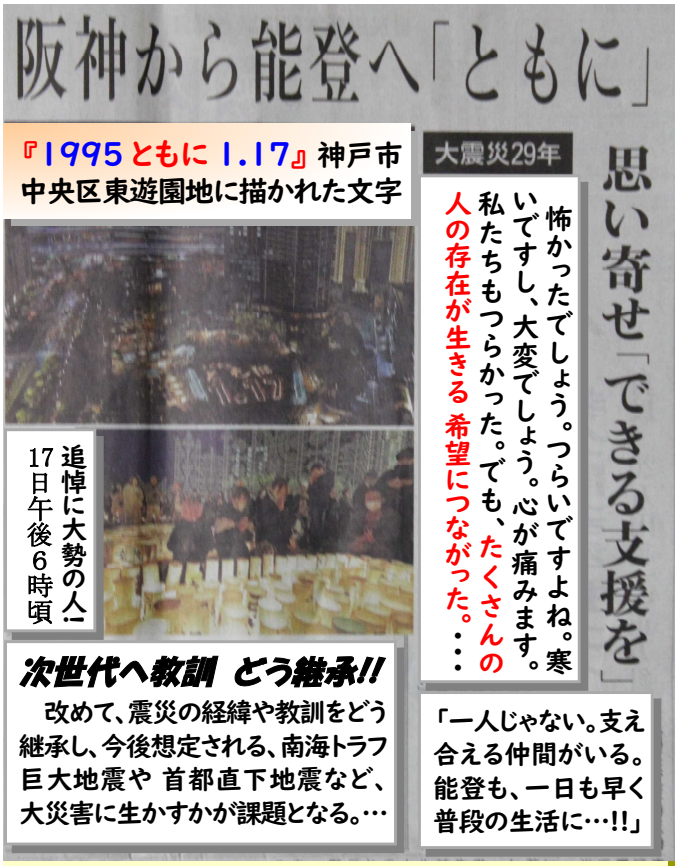
【朝倉地区人権啓発情報センターだより】　2024（令和6）年2月16日（金）

みんなの“人権”が尊重される『まちづくり』への《懸け橋（かけはし）》

No. 62

発　行：
人権啓発指導員
【大 楠　茂 美】

1995（H7）.1.17の震災から29年。支える仲間がいる…「ともに」


阪神から能登へ「ともに」

『1995 ともに 1.17』神戸市中央区東遊園地に描かれた文字

追悼に大勢の人!! 17日午後6時頃

大震災29年

思い寄せ「できる支援を」

怖かったでしょう。つらいですよね。寒いですし、大変でしょう。心が痛みます。私たちもつらかった。でも、たくさんの人の存在が生きる希望につながった。…

次世代へ教訓　どう継承!!

改めて、震災の経緯や教訓をどう継承し、今後想定される、南海トラフ巨大地震や 首都直下地震など、大災害に生かすかが課題となる。…

「一人じゃない。支え合える仲間がいる。能登も、一日も早く普段の生活に…!!」

『1995 ともに 1.17』の文字を形作る竹や紙灯ろう約7000本に、火が灯（とも）りました。…

この記事（西日本新聞の朝刊2024.1.18）が掲載され、一か月余りが…。

自らが経験した、未曽有（みぞう）の苦しみや悲しみ、崩れた家屋、極寒の避難所、被災して臨んだ受験…から29年目。

阪神大震災の被災者や、その子ども世代から、能登半島地震で被災された方々に、…自らのことと重ね合わせた〝阪神から能登へ『ともに』、思い寄せ『できる支援を』〟といったメッセージが、書かれていました。その中で、…

ある学生ボランティアの母親らが、兵庫県伊丹市で被災し、避難所に身を寄せたそうです…。「他人ごととは思えない。あの日から、こつこつ前に進み、再起した街に、私は生まれた。兵庫・神戸ともに頑張ろうというメッセージが届いてほしい!!」との〝想い〟が綴られていました。…親世代が乗り越えてきたであろう時間（とき）を慮（おもんばか）りながら、能登の人たちに心を寄せて…。

その後、2/12（月）同新聞朝刊【社会面】に、『小6から手紙⇔涙の避難所』という記事が…。

【石川県の皆さんへ】　胸が痛くなりました。私は（当たり前のように…）暖かい家の中でご飯を食べて、お風呂に入ることができ…（何のお手伝いもせず（できず）、私は大丈夫って…）情けなくなく思いました。…家族を失って、立ち直れない人がいるかもしれません。その人の分まで、しっかり、精いっぱい生きてください。まだ、避難所生活が…。がんばってください!!

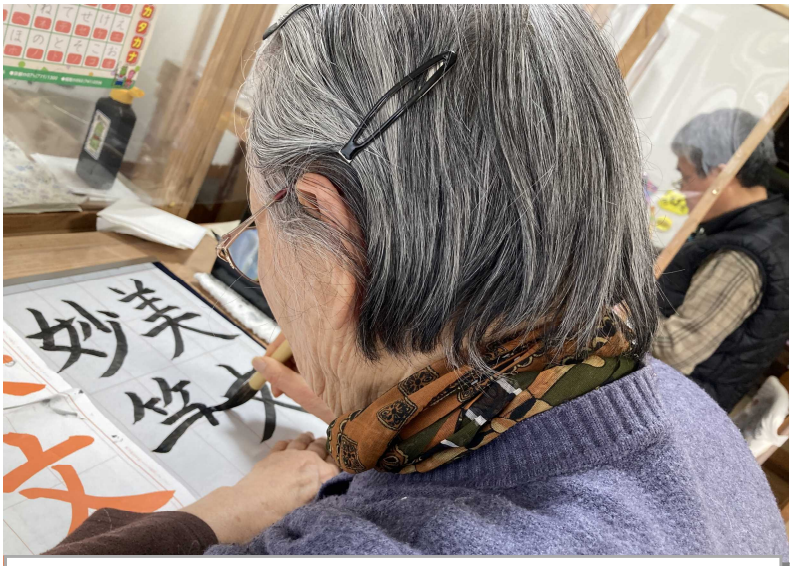
この手紙は、堺市消防局の一員（支援者）として輪島市入りした父親が、避難所になっていた小学校に届けたそうです。…災害派遣中のある府警さんが、この小学校を訪れたところ、被災された人から、「涙が出てきた」「本当に嬉しい」などと声をかけられたとのこと…。

阪神大震災を経験された方の息子さんが、父親となって能登支援に赴（おもむ）き、今度は娘さんが、能登震災で被災された方々に心を寄せ、人と人とがつながり合って…!!

大阪府警は2/5、この娘さんが通う小学校で特別授業を実施し、被災者からの謝意を伝え、5・6年生約120人に現地の様子等を説明されたとのこと…。この娘さんは、「将来は人を助けられる仕事をしたい」「春休みには被災地を訪れ、炊き出しのお手伝いなど自分ができる支援をしたい!」と、お父さんに相談されているそうです。…

～みんなで つなごう!! 〝かけがえのない生命(=人権)〟のバトンを…～

人が 人として、〝最後の一瞬まで 生きる・生き合っていく〟ということは…



「美文妙筆」にチャレンジ。〝一級〟に昇級しました!!

もう一年近くなるでしょうか、今は週二回ほど、母(94才)と一緒に、習字を習いに行っています。先生は姉(…母にとっては娘【次女】⇔長女は、生まれてまもなく病気で他界…)です。

私は68才。高齢の母と机を並べ、一緒に習字の練習をする日が来るなんて、考えてもみませんでした。ペンでも習字でも、文字を書くことが好きで、集中でき「楽しい」と、よく言います。

この写真は、練習(前回)の様子ですが、背筋は伸び、手本を何度も見返し、どこを手直ししたらいいのか考え、考え、何度も、ていねいに書き進めます。…ついさっき、やったことや言ったことなども、「分からん」「知らん」と言う毎日ですが、この時だけは、書いている記憶(残像?)が残っているのか、習字練習の合間のお茶タイム、姉や私とのやりとりが双方向で成り立っていることに、安心(ホッと)しているような〝時間〟を過ごしていると感じます。

一昨年の7月、父(96才)を見送った後、「おじいちゃんは、どこにいったと…?」「何をしていいのか(したらいいのか)分からん」と、一日をどう過ごしたらいいか分からない〝不安〟が、この時だけは、〝安心〟に変わっているような、そんな気がしています。…

両親の〝老いを生きる、生き合う…〟姿を間近に感じ、一緒に過ごす中で、人が人として最後の〝一瞬(いっとき)〟まで生きること、一緒に生き合うことって、どういうことなのか、両親の〝後ろ姿〟を通して、妙に感じます。時々、ふっと出る、母の何気ない「ありがとう」の一言に…。

『かけがえのない生命』の視点から、同和問題をはじめ様々な人権問題について、自分のこととして捉えることの大切さ、今一度、みんなで、考えてみましょう…!!